



自分とは違う他者とすり合わせながら

園長 野中 泉

5歳児の男の子ふたりが、けんかをしていたときのことで。20分以上、ものすごい剣幕で、言い争っていたふたり。泉州弁での巻き舌(?)を交えた舌戦は、なかなかのものだったのですが、長引くけんかにお腹もすいて給食が心配になってきたひとり、けんかの途中で「もう明日しよう」とけんか相手に突然の提案。唐突な提案にきょんとした相方が、すぐさま「けんか明日?あかん。そなん、明日じゃ、けんか始められんもん。忘れるやん、なんのけんかやったか」と返したそのやりとりには、「そりゃ、そうだ」と思わず吹き出してしまいました。

9月号の巻頭で、1歳児のけんかについて書かせてもらいましたが、そんな地道かつ壮絶(笑)なやりとりを何年も重ねてきたうちの5歳児は、なかなか『けんか上手』です。黙っている相手に「黙ってないで、おまえもなんか言え、俺は言うたで」と促したり、逆になんで黙ってるんやと責められた子が「今、考えてる途中や」と歯を食いしばって返したり。けんかに乗じて、「〇〇って、前も、こんなんですかあ」と過去のことをほじくり返そうとすると、その相手が「前のことは関係ないやろ、今はこのこと話せんじゃ」と論点(?)を戻したり。

誤解のないように言いたいのですが、「けんか上手」という表現は、決してスマートに冷静にやりとりができるようになってきたと言っているのではないのです。(もちろん、言葉での表現が上手ではない、1歳や2歳よりも手が出ることは減りますが)顔を真っ赤にして地団駄踏んで、涙をポロポロこぼしながらでも、うまい言葉で言えなくたって、目の前にいる相手にわかってほしいと必死であきらめない、その子どものたちの姿には、私たち大人も学ぶことが多いと、日々感じています。

つい先日ネットの記事で、亡くなった女優樹木希林さんの娘でエッセイストの内田也哉子さんのこんなインタビューを目にしました。普段、夫である本木さんと衝突することがあるかという質問に「しょっちゅうです。夫婦がもめていると、長男が2人とも悪くないから!と止めに来ることもある」と答えた也哉子さん。続けて子供の前で夫婦のけんかを隠すようなことはしていないという、その理由について彼女はこんなふうには話していました。「子供たちの前ではびしっとして、急に影でっていうのではなくて、常にそれはもう、もれてしまっているだけなんですけど、そこの中からもう学んでもらうしかない。こうやって、他人のふたりは一生懸命すり合わせながら、家庭を築いていくんだなと」。

特に隠してもいないのでご存知の方も多いと思うのですが、私は今から6年前に30年近く一緒にいた夫と離婚しています。でも離婚にまで至ったのに変なのですが、実は元夫とはそんなに激しく夫婦喧嘩をした記憶はないのです。もちろん、長い年月の間には、口を利かなかつた日や機嫌の悪かった日はお互いにあるのですが、正面切って思いつき思いのたけを叫んだ記憶はありません。加えて、友だちにも、自分の母親にも元夫の悪口を愚痴ったことも、たぶんなかったと思います。ですから、離婚を決めたときには(誰にも相談せずに)、周囲にそれはもう、驚かれました。でも、一緒に暮らしていた息子にはこんなふうには言われませんでした。「母さんは、怒鳴ってはいなかったけど、母さんの背後には『私はいいい妻、いい母親だから、怒りません』っていう負のオーラがただもれだったから(笑)」。也哉子さんでないけれど、取り繕ってはいても、実はもれてしまっていたということなのだと思え、納得したことを思い出します。

「他人のふたりが一生懸命すり合わせながらの姿から、子どもに学んでもらうしかない」という也哉子さんの言葉は、私たちが、アトムをめざしたい場所を思い描きながら、必死で奮闘している日々の努力、子どもたちに、どんな大人の風景を見せていきたいかというねがいとおなじだと思いました。当たり前ですが、人間関係には、イヤになってしまうこともいっぱいあります。大人になればなるほど、話し合うことが大事とわかつちやいても、面倒だと思ふことの方が正直多い。でも、その一生懸命な「他者とのすり合わせ」の日々が、「共に生きる」ということの、『根っこ』に他ならない、そんなことを考えながらいます。